

「今こそ 愛語を考える」

島根県 永太院住職 えいたいん 森山道宣 もりやまどうせん

愛語とは、相手のことを真に思いやる言葉です。ある片田舎のお寺に、縁あって住職となった若いお坊さんがいました。ある日、お檀家さんがお寺にお参りになって、「若い住職さんが来てくれて、本当に嬉しいです。檀家としても安心いたしました。」と挨拶されました。前の住職が亡くなってから住職が居ない状態が続いていたお寺ですので、お檀家さんの喜びもひとしおのことでしょう。「このご縁を大切に、お寺を守っていけたらと思います」と住職はお檀家さんに感謝を述べました。

それからしばらく経ったある日、またお寺を訪れたお檀家さんは、何やら難しい顔をしていらっしやいました。気になったご住職が「どうなされたのですか?」と問いかけますとお檀家さんは「私も、老い先そう長くは無いかと思います。子供達は信心が無いので、今のうちに『墓じまい』をして仏壇も片付けたいと思うのですが」とおっしゃいました。

ご住職はお檀家さんの話を聞いて「今は忙しく働いている子供さん達ですが、十年後二十年後、仕事が一段落した時に、ご先祖様をお探しにならないでしょうか?お子さんたちは本当にご信心を無くしてしまわれたのか、もしくはただ仕事に一生懸命で余裕が無いだけなのか。一度ゆっくり話してみてはいかがですか。よく耳にする話ですが、お子さんたちが親の葬儀で『もっと、色々聞いておけば良かった』と悔やまれる方が多くいらっしやいます。本当の気遣いとは、少々疎まれても伝えることはきちんと伝えることではないでしょうか」と話したそうです。

時代の流れでしょうか。子供達に、ご供養のありがたさを伝えることに抵抗のある方が多くなっています。間違っではいけないのが、伝えることと強要することとは同じではないということです。何も耳に優しい言葉をかけるだけが『愛語』ではありません。真に相手を思いやるとはどういふことなのか、将来的に困る事の無い様に相手を思いやって伝えるのが、『愛語』だと思います。『愛語』の気持ちで、思いやりを満ちた行いをいたしましょう。